



天平のひろば

2025 年 4 月発行

94 号

☎/Fax 0742-34-7713

e-mail mpoheijyou@yahoo.co.jp

<http://www.heijyonet.nara.jp>

NPO法人平城宮跡サポートネットワーク（NPO平城宮跡）

〒630-8577 奈良市二条町 2-9-1 奈良文化財研究所内

第一次大極殿院・東楼の 復原整備を進めています



東楼完成イメージ(大極門の北側より南東方向に東楼を望む)

国土交通省では、令和4年4月より東楼の復原整備（施工者：(株)竹中工務店大阪本店）に着手し、令和7年度の完成（開門）を目指し整備を進めています。令和7年3月現在の進捗は東楼の瓦葺が完了し、約420kgになる鴟尾が設置され、より荘厳さを増した雰囲気が現れてきました。



左：復原された鴟尾、右：鴟尾の金型

また、平成26年（2014年）より奈良文化財研究所のご協力のもと、研究が進められていた古代技法に基づいた木口金具24枚が復原され、東楼の地垂木、飛檐垂木に取り付けられました。その位置は、後日、皆さまに情報を提供させていただきます。



古代技法による飛檐垂木木口金具の取り付け

なお、東楼復原整備についての情報を奈良文化財研究所の監修のもと、映像製作を行っています。復原事業情報館のシアターコーナー「東楼復原の舞台裏」にご注目頂き、是非、足を運んで頂ければと思います。また、東楼の整備に併せて、回廊の整備や素屋根の移動に向けて大極門を1月6日より一時的に閉門し準備を進めています。工事関係者等の出入りや規制等により、ご不便をおかけすることとなりますが、皆さま宜しく願いいたします。



令和7年3月現在 東楼素屋根内

(国営飛鳥歴史公園事務所平城分室 田中元洋)

第23回平城宮跡クリーン大会

4月19日平城宮跡クリーン大会は、奈文研、平城宮跡歴史公園、同管理センター、GPMO、NPO平城宮跡共催に400名が集い、軽トラ一杯のゴミを拾いました。参加者から世界遺産にゴミが無かったのが良かった。気持ちもスッキリしました。また、参加したいと感謝の声がありました。（環境保全部会）



遺構展示館駐車場で集合の様子

あちこち見て歩き ⑨ 芭蕉の大和路(三)

芭蕉の3回目の大和の旅は、長谷寺から三輪、多武峰、細峠を越えて、念願の吉野に入った。途中、

雲雀より空にやすらふ峠かな

と吟じ、西河では

ほろゝと山吹散るか滝の音

と、流れ落ちる滝の音と山吹の黄色い花をとり合わせ、「ほろほろ」と擬態語を使って繊細で軽やかな句を詠んだ。杜国が同行している時の句は、一段と輝きを増している。吉野に3日滞在して花見を満喫した後、葛城山、高野山を訪ねて、四月上旬再興中の東大寺に行った。四月八日の灌仏の日には、

灌仏の日に生まれあふ鹿の子かな

と釈迦と同じ日に生まれた鹿の子に温かいまなごしを注いでいる。この年(1688)の灌仏会には東大寺大仏殿建立の鉦始(起工式)の行事が催されており、芭蕉は猿雖ら伊賀の衆達と会ってこの法事に参加し、露座の大仏を仰いだ。これで大仏様もやっと雨露をしのげると期待して完成を待ったのである。唐招提寺にも赴いて鑑真和上の尊像を拝し、

若葉して御目の雫ぬぐはばや

と「涙」ではなく「雫」を使って渡航のために失明した鑑真への熱い思いを表している。この旅では山の辺の道を巡って、在原寺や石上神宮なども参拝している。

芭蕉は「古人の跡をもとめず、古人の求めたる所をもとめよ」(古人が残した形骸を追わず、古人が求めようとしたものを追い求めよ)という空海の言葉を愛した。老境の身で一日平均四里(16km)歩き、心身疲れていたはずであるが、それでも西行や古の人を追慕する旅を続けていたのである。

元禄二年(1689)『おくのほそ道』の旅を終えて、大垣から伊勢神宮の遷宮式を奉拝した後、一度故郷へ帰着。十一月春日若宮おん祭りの見物に行ったのが、4回目の大和への旅である。この時、再興中の東大寺大仏殿にも立ち寄った。まだ大仏の頭部は出来上がっておらず、柱立さえ進んでいなかったの

初雪やいつ大仏の柱立

と嘆いていて、芭蕉が大仏に深く思いを寄せているのがわかる句である(大仏殿の完成は、芭蕉没後15年目の宝永五年(1708))。

5回目は元禄四年(1691)二月、興福寺新御能見学のために出かけた旅である。この時は、前年元禄三年八月に待ち望んでいた大仏の頭部が完成しているので、その尊顔を拝したに違いない。彼は永禄十年(1567)松永久秀が東大寺焼き討ちをした後、銅板で補修されていた大仏と現在私たちが拝している大仏の両方の顔を拝していたのであって、まさに歴史の生き証人なのである。

翌年、元禄五年三月八日から四月八日まで大仏開眼供養がなされたが、残念ながら、この時は江戸に帰っていて参列できなかった。(河野良子)

木簡ガイドツアー

3月15日雨のなか「木簡の日」ガイドツアーに36名が参加。聖武天皇大嘗祭木簡出土地〜下ツ道西側溝〜藤原麻呂邸跡〜長屋王邸(ミ・ナール)を散策。参加者は、熱心に耳を傾けて奈良時代に遭遇したようだと感動していました。

遺跡見学会

3月20日NPO平城宮跡15名は平城宮跡資料館で、春期企画展(平城宮・京の調査研究最前線)の解説を皮切りに、小田裕樹奈文研主任研究員の説明で、佐伯門〜玉手門へと進み、平城宮南西部南苑跡〜朱雀門〜宮跡庭園〜奈良市役所〜南都銀行本店(舎人親王邸推定地)を散策。同館2Fギャラリーは瓦や土器の展示がある旨説明があり、普段あまり知ることのないコースを歩くことができました。



宮跡庭園で小田主任研究員解説の様子

(文化・ガイド部会)

好評 平城京 歴史講座

樋笠逸人さん（奈良博学芸部美術室研究員）が2月8日162名を前に「平城宮と聖武天皇の即位・大嘗祭」と題し講演。



大嘗祭の成立は天武・持統朝の頃で、現代の儀式は平安時代前期から継承され、天皇の即位後、最初の11月の^{うのひ}兔日の深夜に行われる。大嘗祭を

めぐる議論は折口信夫以来活発になされ、平成の大嘗祭のとき折口の説が否定され、令和大嘗祭は平成の祭祀に倣っている。

平城宮の東区朝堂院からは5回分の大嘗宮遺構が検出され、いずれも平城遷都以前の掘立柱建物を踏襲している。一方、即位式が行われた第一次大極殿は、唐の文化を取り入れた特別な儀式空間にし、第二次大極殿は礎石建ちで瓦葺きの建物に替えられている。大嘗祭は伝統的な祭祀の姿を継承し、即位式は先進的な儀式として位置づけられたのが聖武天皇の即位・大嘗祭であった。

聖武天皇が即位した「神亀元年(724)」の木簡と共に「大嘗」と書かれた木簡が2024年に出土した。土坑に一括廃棄された荷札や付札も大嘗祭に関わる木簡であることは間違いない。残された課題解明とこれからの研究に期待したい。（編集部）

大林潤さん（奈文研上席研究員）が、3月8日147名を前に、「法隆寺金堂壁画の古材の昭和大修復」と題し講演。



法隆寺は、飛鳥時代の金堂や五重塔だけでなく昭和まで各時代の木造建築物が建っている。木造建造物は老朽化し、修理しなければ

維持することが出来ない。法隆寺も修理を繰り返し維持されてきた。

明治になると、神仏分離令で寺院は資金が困窮した。その後、文化財に対しての評価が変わり、国宝保存法が成立し、建造物も国宝に指定され国の補助金で修理するため調査研究が行われるようになった。昭和になって法隆寺も金堂の焼失など

不幸な出来事もあったが昭和大修復が行われた。

修理の過程で建築当初の形式に復原することにした。老朽化や復原のために撤去した部材、火災で損傷した部材は取り換えられ、古材は西岡常一棟梁等によって永久に保存する材や予備として保存をする材などに整理され保存されている。

4000点に及ぶ古材を10年かけて調査し、国宝建造物と一体として附（ついたり）指定された。文化財は残す努力をしなければ残らない。今後も不断の努力が必要である。（編集部）

竹田正則さん（橿原市埋蔵文化財副統括）が、4月12日166名を前に、「藤原宮の造営」について、講演。



造営は692年に持統天皇が始め、694年に藤原京遷都、文武天皇の時にほぼ完成した。『続日本紀』に大極殿の記述が見られるのは

698年なので造営にはかなりの年月を要したと思われる。

藤原京は最初の都城として南北九条、左京二坊以東が東に張り出す東西十坊で造営されたと考えられ、広さは江戸城や皇居と同じ面積である。そこに膨大な量の土を投入し、整地して道路を敷設し街区を形成した。五位以上の皇子や皇女、諸臣に加え、六位以下の者にも位に応じて宅地を与えた。木材を運ぶ運河も掘られ土、礎石、瓦、木材など驚くべき量で、多大な労働力も費やされたと推察される。こうして704年に文武天皇によって初めて藤原宮の範囲が定められ、人々は京内に住むようになった。万葉集に、「大君は神にしませば赤駒の腹ばふ田居を京師と成しつ」と詠まれたように、藤原京は天皇による今までにない本格的な都の造営であった。（編集部）

次回の平城京 歴史講座(いざない館)

5月10日：宇野隆志（橿考研主任研究員）

「興福寺の復興を支えた遺跡」

6月14日：江浦洋（元興寺文化財研究所研究

「二つの小治田寺－奥山廃寺と大后寺」

7月12日：山口等悟（奈良市埋文調査センター学芸員）「演題未定」

わが つま ゆう や
我 妻 佑 哉

都城発掘調査部考古第二研究室研究員



1998 年山形県米沢市生まれ。2021 年 4 月大阪大学文学部卒業、2023 年同大学院文学修士修了、同年 4 月同大学院博士に進学、2024 年 11 月奈良文化

財研究所採用となり現在に至っています。

考古第二研究室では土器・土製品、および瓦磚類や凝灰岩・礎石などの石製建築材料を対象として調査・研究をしています。土器の重要な役割のひとつが年代を決定することで、形や大きさ、製作技法が微妙に異なります。

我妻さんは子どもの頃から歴史に興味を持ち、文化財の宝庫関西で考古学に進むことになりました。特に灰色で硬い須恵器の研究は、同じ時期に全国で一見よく似た形をしていながら、細かな産地差が存在する可能性に目を向けて進めており、最近韓国で須恵器のルーツ陶質土器の研究もしています。大学に近い千里丘陵の豊中市桜井谷窯跡群で初めて須恵器を発掘、その感動は今も忘れないと言っています。更に、褐色で軟質の焼き上がりの土師器は 700 度～900 度と低温の野焼きで焼かれ、須恵器は 1100 度以上の高温の登り窯で焼かれ、信楽焼や備前焼のルーツは須恵器だと普段聞けない視点で熱弁。平城京跡では東院南方遺跡の発掘に携わり、そこでも多数の土器類を検出。良好に保存されており今は整理中とのことです。このように到底知り得ない古代の器の情報に目を輝かせ話していただきました。

学生時代、スポーツは同好会程度に親しみ、奈文研ではサッカーを楽しんでいます。また趣味は料理で、外食より自炊派でレシピを考えながらラーメンを作るのが得意とのこと。

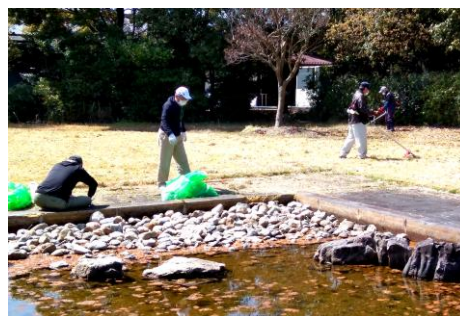
最後にボランティア活動は、文化財の保存と活用が必要で、次世代の人たちに上手く、継承・発展して欲しいと切望されました。(編集部)

平城宮跡を“楽しむ”人たち

資料館の中庭をきれいにしよう！

NP0 平城宮跡は桜見守り隊の深刻なクビアカツヤカミキリの被害を 1 月 24 日「美しい奈良県づくり」の総会で報告しました。

2 月～3 月は梅や桜の開花を前に剪定、資料館中庭の清掃、桜並木ヒコバエ除去に奔走しています。



資料館中庭の庭園廻り清掃(1)



資料館中庭の庭園廻り清掃(2)

(緑の保全部会)

新規会員の紹介/募集

***新規会員の紹介* (4 月 1 日現在)**

小西博之さん、竹中久義さん、中谷務さん、久谷公一さん、福留利夫さん、5 名が入会しました。

***新規会員の募集*〈活動支援/入会のお申し込み〉**

❖個人が支援/活動 年会費 3,000 円

❖法人が支援/活動 年会費 10,000 円

◆お申込み：☎&ファックス 0742-34-7713

編集後記

平城宮跡は春真っ盛り。足元に注目してみると、タンポポ、サギゴケ、ヒメオドリコソウ、シロツメクサ、オオイヌノフグリ、カラスノエンドウ…等々。身近な春の野の花を観察してみても、いかがですか？ (Y.S)